

加賀家文書 翻刻・現代語訳1 「菊のかんざしみだれ髪」  
—蝦夷通辞によるアイヌ語版「お吉清三」口説—

深澤 美香

キーワード：アイヌ語、加賀家文書、蝦夷通辞、お吉清三

0. はじめに

およそ 18 世紀末から 19 世紀、江戸幕府が蝦夷地を直轄支配していた時代に、秋田県（八峰町）八森の加賀家は代々蝦夷地へ渡り、そこで多くの資料を書き残した。これらは現在、「加賀家文書」と呼ばれ、北海道の別海町郷土資料館附属施設加賀家文書館がその大部分を所蔵・保管している<sup>1</sup>。加賀家の一族の務めがアイヌ語と日本語の通訳をする「蝦夷通辞」であったことから、「加賀家文書」のなかにはアイヌ語関連資料も文書資料 2,537 件中 16 件存在する<sup>2</sup>。北海道の根室周辺のアイヌ語は、これまでまとまった資料が発見されておらず、この地域のアイヌ語を知る手がかりとして「加賀家文書」は欠かせない存在であると言える。本稿では、この「加賀家文書」の一資料である『御手本』（資料番号 31）<sup>3</sup> に記載されている「菊のかんざしみだれ髪」の簡略的な概説とそのテキストを紹介する。

1. 書誌的研究

1. 1. 加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」について

「菊のかんざしみだれ髪」は、加賀家文書（資料番号 28, 31）に所収される歌物語である。「加賀家文書」の大部分を執筆した 3 代目伝蔵（1804-1874）がアイヌ語で作詞したものであり、原歌は「お吉清三」口説と考えられる。今回、扱う資料は、アイヌ語教本として加賀家に伝わっていったと考えられる『御手本』（資料番号 31）という和綴の中の一編である。また同じく「菊のかんざしみだれ髪」という表題のものが、『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①他』（資料番号 28）の和綴に所収されている。丁寧に清書された 31 番とは打って変わって、28 番は、訂正線を引いて書き直された箇所が非常に多い。誤り方も数行書き飛ばす等であって、ただ急いで書き写したかのようにも見える。

これら 2 編の他に、類似資料が「おきつ清三戀の夜嵐」という表題で、加賀康三(1932) によって

<sup>1</sup> 「加賀家文書」に関する概説および資料館に保管されるまでの経緯等については、別海町郷土資料館(2001, 2012) を参照されたい。資料は、北海道道立図書館のマイクロフィルム等でも公開されている。

<sup>2</sup> この数字は、別海町郷土資料館(2012) に依拠するが、これば作業分類による件数であり、別分類にされている資料にもアイヌ語が散見される。また、別海町郷土資料館以外に保管されている資料も確認されており、実際にはもう少し大きな数字で捉えておいた方がよいかもしれない。

<sup>3</sup> 資料番号は、別海町郷土資料館(2012) の目録に記載されている番号を示す。

報告されている。

此の唄は、半紙四ツ切紙數綴込み拾參枚より成り、著作年月日は弘化二年巳七月新板としてゐる。表題は「おきつ清三戀の夜嵐」で、傍注に朱書きで「千島なまりのヂヨンカラぶし」としてある。

表紙裏面には「兼て御存知の如く秋田八森の不動様奉賀帳に多少御志なし下され候御若い郎へ爲御禮左の如くの唄を愚作し夫々献上致し候間幸い御尊前サル御場所へ御下相成候由御笑ひ草金壹匁代御禮奉申上度候」と朱書きしており、末文表紙には右の歌が書添えてある。

「穴かしこ、人に見してはなほ笑い草定めなき郎の寝言なれとも」

これが一冊は柴田政吉様へ加賀屋傳藏が差上げたのは實事で、唄の作者が傳藏なる事に思ひあたる。柴田政吉氏は士分で見廻り役勤番であつたらしい。以下唄の本文を一通り書く。(文中、島の圖あり、省略す)

加賀(1932)が紹介した本文は、途中で和訳が抜け、アイヌ語のみが記載されている箇所が見られる。また、唄の終わりに囃子の表現が付記されており、これも上記2種の資料には無い特徴である。加賀(1932)が元にした資料が原本なのか、柴田政吉に贈呈したとされる一冊が原本なのか、はたまた、草稿資料のようなものが別々に存在するのかと想像は尽きないが、どれも既に失われてしまった可能性があり、書誌学的研究は今後の調査に託されるところが大きい。

そこで今回は、加賀家文書(資料番号 28, 31)の資料、特にアイヌ語の「御手本」とされた31番のものをベースとし、この歌物語の翻刻にあたることにした。28番との差異は、アイヌ語部分に限り註に示すが、それ以上の比較研究は、今後新たな資料が発見されることを期待し、一旦保留にしておきたい。

## 1. 2. 『御手本』の書誌情報

別海町郷土資料館(2012)によると、『御手本』は、弘化年間～文久3年8月(1844～1863)に加賀伝蔵によって記されたものと推定されている。寸法は、縦25cm、横17.5cmで、結び綴じの形態をとる。全129丁。表題に『御手本』とあり、場所内の行事や申渡、物語などがアイヌ語と日本語で書き連ねてある。中でも、「アイヌ語解の歌(抄)」等の数編は翻刻あるいは現代語訳がなされてきたため、この和綴の存在はある程度知られていると言えよう(詳しくは、秋葉(1989)、別海町郷土資料館(2002: 13-54)を参照されたい)。また、アイヌ語研究としても、浅井(1972)が「加賀屋文書の中のチャコルベ」という題で、当資料に記載されている「チャコルヘ 口味持言」を紹介している。筆者による図版の照合によれば「チャコルベ」(A)が資料番号28、「チャコルベ」(B)が資料番号31で、

いずれも「菊のかんざしみだれ髪」の後に記載されている。

## 2. テキスト紹介：「菊のかんざしみだれ髪」（資料番号 31）

### 2. 1. あらすじ

国の中心、京都の三丁町に与右衛門という旦那がいらっしやった。集まりでは上座にいらっしやる評判の高いお方で、反物や絹織物などの小間物を売って商売をしていた。その旦那のところに和人が集まり、その売買する声は幾多のワオ鳥が鳴き合っているかのようで、台所（の取り込み）は忙しく、川瀬のざあざあ流れる水音のようであった。この家の厳かな夫婦には、たった一人の小さな娘がいた。夫婦は、そのひとり娘におきつと名付け、耳輪の宝石のように、その子の成長ばかりを楽しみに大切に育てていた。そのうちに、おきつはこの上ない程に美しく成長した。その美しさと言えば、結んだ髪はあやめの花、締めた帯は桜の花にも劣らないほどで、秋近くに見る紅葉の、雄鹿を呼ぶ雌鹿のように男達を狂わせるほどの美女であった。

与右衛門に傳く若い衆の中に、清三という和人がいた。清三は、殿方なる態度の、読み書きや算術を教える者で、実直な心持の美青年であった。色気づいたおきつは清三と度々恋路を交わすうちに、恋慕う気持ち病気ようになって、清三のことが忘れられなくなってしまった。二人は互いに話をする暇も無く、人目を忍んで文を交わした。おきつが「妻になります」と書けば、清三は「夫になります」、「絶対に離しません」と書いた。その記証文は黄金のようで、堅く誓った心は証約の宝であった。そして、二人は自分の名前を書いた上に血判を押したのだった。

長い月日に重ねる不義。誰が告げたのか、おきつの父母がそれに気づいて憤慨し、急いでおきつを呼び出した。おきつが返事とともに父母のお側へ上がると、父親が「おきつ、これからわしが言うことをよく聞きなさい。売店の清三と何かあったという話がわしの耳に入ってきた。事実か否か白状しなさい」と言うので、おきつは、しらばくれて「疑われた、推測の、計算の無い話よ。誰が清三と一緒にになると言うの？」と返した。それから今度は、清三が呼ばれた。清三は急いでソロバンや帳面を片付けもせず、旦那夫婦のお側に素直に出て行った。旦那は清三を睨んでこう言った。「清三よ、お前を呼んだのは軽いことではないぞ。思いもよらぬ不義をしたやつめ。おきつをお前の妻に誰がくれたというのだ。誰が仲人で夫婦になるつもりだ。様々な我が儘、この蛙野郎。わしは馬鹿にされたのだな。このようなことがあっては、うちに置いておくことはできない。お前の家に追って書状を送るから、早く出て行きなさい。これきりでお別れだ」。清三は悲しむことも慎み、事実と諦めて物申すことも無く、仲間達にもきまりが悪いので、部屋でひとり泣きながらいた。紺の股引のような脚絆に、紺のわらじ掛けの紙緒のわらじを履いて、「さあ、本当に出発するぞ」と、清三は旦那の前に頭を下げて手をつき別れを申し上げた。「ご主人様、ご夫婦様。長い間、親子のように可愛がって頂きました。そのことを忘れたわけではありませんが、明らかにこの御礼は至らないものでございます。涙が

出るほどに有り難く思っているのです。もし神々の御恵みがありましたら、黒雲が晴れ、白雲になってからまた拝みたいと、そればかりを祈り、ここでお暇申し上げます」。おきつは、そぞろ涙に立ち聞いた。清三が目を見合わせると、おきつは物も言わずに後戸を閉め、「何の私の片割れ（女神）が私の母になり、何の砂埃（男神）が私の父になったのか。その強い心意気は鬼神のようね。神々が大勢集まっても陰の神（立神）は怒り去る様子で、清三を支える神々では無いんだわ。本当に今すぐ清三を行かしてしまうなら、私は後から追いかけます」とつぶやいた。

それからというもの、心変わりしたおきつは、母親の前でも足踏みし、父親の前でもけんけん歩き、まるで兎のように怒り狂う様子であった。とうとう旦那夫婦は考え直し、黄金の宝を菊屋の清三の家へ送ってから伝言を出して清三を貰うと、娘と結婚させた。おきつと清三は喜び、父母を大切にした。所帯を持つようになると男の子と女の子が生まれた。与右衛門は喜び、目を覚ましたかのように、にこにこ微笑みながらご夫人と孫二人を抱いて、可愛がっているのです。やんれー。

## 2. 2. テキスト表記について

### (1) 整理番号

テキストの頭に丁数と行数を示した。最初の3桁の数字と漢字は丁数、続く2桁の数字は行数を表す。「033 表 01」であれば、「33 丁表の1 行目」であることを示す。

### (2) アイヌ語ローマ字表記

カナとローマ字表記の対応関係は、ここで細かく検討・説明することはしないが、原則、現代のアイヌ語表記に合わせた。

#### ①推定形について：

子音の挿入など特別な操作を行ったもの、母音の判断が難しいもの、方言差があり語形が特定しにくいものについては、箱括弧 ([ ]) の中に語形を入れた。この形を「推定形」と呼ぶ。

#### ②母音表記：

江戸時代のアイヌ語資料全般に見られる傾向として、「エ」と「オ」が「エ」と「ヲ」で表記されるため、アイヌ語の /e/ と /y(e)/、/o/ と /w(o)/ に関する表記上の区別はない。さらに、母語の日本語秋田方言の影響なのか、「イ」と「エ」の区別が曖昧であって、これら2つの母音で表記された場合は、i /i/、e /e/、中間音の y /j/ のどの音素を表したもののなのか特定しなければならない。この場合、地理的に最も近い方言の語形に合わせるというのが一つの手段であり、具体的には、根室周辺の美幌、釧路、白糠、十勝の語形を参考にした。

#### ③わたり音の表記：

(2) ②で見たように、表記からわたり音 (w, y) の有無を判別することは、ほぼ不可能だと言え

る。「集まる」という意味の「ウエカレ」を例にとってみると、『方言辞典』では、わたり音のない uekari (複数形の uekarpa) が、八雲、帯広、美幌で、わたり音のある uwekari が、幌別、沙流、旭川、名寄、宗谷で採録されている。いずれもカナ表記は「ウエカレ」で表しうするため、表記からは特定できない。さらに言えば、調査者や被調査者、あるいは表記方針の違い等によって旭川や沙流の地域でも uekari と辞書等に採録されることがあり、地理的な分布も今ひとつ判断材料にならないことがある。このような背景から、本稿では、原則としてわたり音の表記はしなかったが、必要に応じてわたり音を挿入した箇所もあり、未だ検討の余地を残しているということを予めお断りしておきたい。

### (3) その他の表記

#### ①小書き：

促音の「ツ」が小さく表記されていることがある場合は、出来る限り小書きで示すよう努めた。

#### ②濁点：

「菊のかんざしみだれ髪」(資料番号 28) のアイヌ語カナ表記と比較した際、最も目立った差異が濁点の有無であった。これについては、全て脚注に示した。

#### ③繰り返し記号：

縦書きを横書きにしたため、繰り返し記号の「く」と「ぐ」は、「 $\backslash$ 」と「 $\backslash$ 」で表した。

#### ④「休止」の表記：

「菊のかんざしみだれ髪」は、原歌の「お吉清三」口説と同様、七七調反復の形式を保っている。音の数え方は、アイヌ語のカナ表記を日本語の音体系(モーラ数)で読むという考え方によって成り立っており、撥音、長音、促音を1と数える。例えば、「クン子」は kunne という、アイヌ語では2音節の単語だが、日本語では「ン」を1モーラと数えるので全体として3と数える。同じように、語末の子音も1と数えるため、「キマテク」は kimatek という3音節の単語だが、ここでは4モーラの単語と考える。また、拗音はモーラ数に換算されない(例:「ルシユイ」の「シユ」は、「ユ」を拗音として考えるため、全体として3モーラと数える)。

これが4/4拍子の歌詞だとすれば、本文は「一コト」<sup>4</sup>につき、1小節がそれぞれ3、4、4、3音符になるように区切られており、1小節毎にスペース(空白)が入っているように見える。ただし、必要などころに空白が入っていないこともあれば、余計に入り過ぎていることもあって、区切りが判然としない箇所もある。とはいえ、拍数にこだわって書いたことも、空白がいわゆる音楽的な情報を表していることも恐らく間違いのないことであるため、空白はできる限り原本に即した形で入れることにして、判断がゆらぐ部分は上記の規則を参考にすることで区切りの実現を目指した。

<sup>4</sup> 口説では、七音+七音の十四音節を一つの単位として「一コト」(ひとこと)と呼ぶ。

2. 3. 翻刻・註釈・現代語訳：「菊のかんざしみだれ髪」（資料番号 31）

菊のかんざしみだれ髪

033 表 01	モシリ	シヤハ子ワ <sup>5</sup>	キヤウ	ト	コタン
033 表 02	國の mosir 國の	かしらに sapa ne wa かしらであって	京都 KIYAUTO 京都の	といふ	所 kotan まち
033 表 03	サンチヨ	マツヤタ <sup>6</sup>	ヨエモン		ニシハ <sup>7</sup>
033 表 04	三丁 SANCIYO 三丁	町にて maciya ta 町の	与右衛門 Yoemon 与右衛門		旦那 nispa (という)旦那は、
033 表 05	エキリ	ロルケタ	シアシヨ <sup>8</sup>		アシベ <sup>9</sup>
033 表 06	日常の集も上座する ikiri 集の上座の方で	rorke ta	評ばんの高き [siasur'as] pe 評判になっている人(で)、		人から
033 表 07	ウセブ	チウベフ <sup>10</sup>	シヤランベ		エキリ
033 表 08	反物 usep 反物	あらもの [tupep] 紐(?)	呉服 saranpe 絹織物		類 ikiri などたくさん
033 裏 01	ウサナ <sup>11</sup>	モムクベ <sup>12</sup>	ア子		エホク <sup>13</sup>
033 裏 02	いろ／＼の [usayne] いろいろな	小間物 momok pe 小間物	商ひ an=eihok. が売られていた。		する

<sup>5</sup> シヤハ子ワ：資料番号 28 では、「シヤバ子ワ」と表記されている。

<sup>6</sup> マツヤタ：資料番号 28 では、「マチヤタ」と表記されている。文法的には、位置名詞の or を入れた maciya or ta のほうが適當。

<sup>7</sup> ニシハ：資料番号 28 では、「ニシバ」と表記されている。

<sup>8</sup> シアシヨ：資料番号 28 では、「シアシヨロ」と表記されている。

<sup>9</sup> シアシヨ アシベ：資料番号 28 の「シアシヨロ」をもとに、推定形を [siasor'aspe] とした。；《語解》siasur'as pe【名】(<si-asur-as pe 本当に・噂・立つ・者) 評判になっている人 [者]。ただし、si- の解釈には疑問の余地が残る。；《参考》「siyasuraste【自動】[si-y-asur-as-te 自分・(挿入音)・うわさ・立つ・させる] 名が聞こえている (いいことでも悪いことでも)」(沙 T)。

<sup>10</sup> チウベフ：tupep は、「かた結び」(沙 T) という意もあるが、ここでは店の商品なので、「投げてひっかけて捕へる、投縄、紐」(Kb) か、『方言辞典』によると、八雲、沙流、美幌の地域でこの語形が現れるが、いずれも「わな」という意味。和訳の「あらもの」は、「荒物(新物)」のこと。

<sup>11</sup> ウサナ：未詳。ここでは、報告されている形で一番近いと思われる usayne を採用した。

<sup>12</sup> モムクベ：momok は、『バチェラー辞典』で「普通ノ、凡俗ノ。adj. Common. Vulgar.」が確認できるのみである。

<sup>13</sup> ア子 エホク：「ア子」が 4 人称主格人称接辞の an= 「(不特定の) 人が～する」だとすれば、この接辞は 2 項以上をとる動詞にしかつかないため、「エホク」が 1 項動詞の ihok「商売する」であるとは考えにくい。よって、ここでは「売る」という意味の 2 項動詞 eihok を採用した。；《参考》『方言辞典』によると、eihok(八、幌、名、樺)、eyyok(沙、帯、美、旭)、eiyok(旭)、ehok(宗)、eihoh(樺) という方言差が見られる。宗谷の ehok は eihok の約まった形と見られることから、より分析的な形を採用することにした。

033 裏 03	ニシハ	シシヤモ	ウエカレ	ウコイホクハウエ <sup>14</sup>
033 裏 04	旦那 nispa 旦那	人々 sisam 和人が	集り uekari 集まり	売買する声 ukoihok hawe 売買する声は
033 裏 05	エン子	ワヲチリ <sup>15</sup>	ウカワシ <sup>16</sup>	コラツ
033 裏 06	数多集 inne 数多の	ワヲといふ鳥 wawo cir ワオ鳥が	声たし [ukawasi] 鳴き合う	ことく koraci ごとく、
033 裏 07	[二羽のワオ鳥の図] <sup>17</sup>			
034 表 01	ウシヤロ	モナシヤク <sup>18</sup>	ヘチャラセ <sup>19</sup>	フミ子
034 表 02	臺所の usar 下座は	取込は monasak 忙しく	川瀬音のことし [pet] carase 川がざあざあ流れる音のようであった。	humi ne.
034 表 03	エ子キ	ツセウン	バセ	ウムレクル <sup>20</sup>
034 表 04	斯なる ene ki このようにする	大家の cise un 家の	おもゑ pase 厳かな	夫婦は umurekkur 夫婦は
034 表 05	バテキ	コロクシュ	シ子ホン	メノコ
034 表 06	唯 patek ただひとりしか	壱人の kor kusu 持たないので、	むすめ sine pon 一人の幼い	持あり menoko 娘に

<sup>14</sup> ウコイホクハウエ：ukoihok hawe であろうか。；《語解》ukoihok【動1】(<u-ko-i-hok 互い・に・もの・を・買う) 売買する。

<sup>15</sup> ワヲチリ：wawo (もしくは wao) は、「アオバト」のことを言う。cir が「鳥」という意味を表すため、「ワヲチリ」の原文和訳は「ワヲという鳥」と書かれている。三浦(2012)は、東北地方に伝わる「馬追(マオ)」とアイヌ神謡の「ワオ」というアオバトの由来譚を追うことで、両者の関係を「比較的あたらしい時期、十九世紀前半の、東北とアイヌとの接触によって生じたものだ」と結論づけたが、伝蔵がここで「ワヲ」を用いたのは東北の伝承の影響というよりも、「和人がアオバトになった」というアイヌ神謡の由来譚を思い浮かべた可能性がある。詳しくは別稿にて論じることとする。

<sup>16</sup> ウカワシ：ukohawasi の約まった形と解釈した。；《語解》ukawasi【動1】(<u-k(o)-(h)aw-asi 互い・に・声・を立てる) 鳴き合う。

<sup>17</sup> 資料番号 28 では、この後に「此鳥鳩に似て／形如図 数十羽集りて さへつる声／人間の 語る言に似て 土人衆も迷ふなり」という説明がなされる。

<sup>18</sup> モナシヤク：未詳。《語解》monasak【動1】(<mon-a-sak 手・?・を持っていない) 忙しい、せわしない。；《参考》『久保寺辞典稿』によると monasak は、monkoan 「忙しい、せわしない」に同義と解される。「忙しい」という意味を持つ語形には、接頭辞 yay- がつき、a が落ちた yaymonsak が、八雲、宗谷(H)、沙流(T) で見つかるほか、yaymoysak 沙流(H)、yaymosak 帯広(H)、monasap 千歳(N)、沙流(H)、yaymonasapka 美幌(H)、montapi 旭川、名寄、宗谷、樺太(H) などがある。

<sup>19</sup> ヘチャラセ：資料番号 28 では、「ベチャラセ」と表記されている。「チ」が続く際、前の促音が表記されない傾向があることから、推定形を [pet] とした。

<sup>20</sup> ウムレクル：促音表記はないが、043 裏 07 に合わせて、umurekkur とした。

034 表 07	ヲキツ	レイコレ <sup>21</sup>	ホトエバ <sup>22</sup>	コラン
034 表 08	おきつといふ名を付て Okici [re(h)e kore] おきつという名をつけ、		御呼 hotuypa 呼ん	なざる kor an. でいた。
034 表 09	タマノ	ニンカリ <sup>23</sup>	シトキ子 <sup>24</sup>	ホコノ
034 表 10	玉の tama NO 玉の	耳かねの ninkari 耳輪の	よふらくのと sitoki ne シトキである	いふて pokon ように
034 裏 01	チウコ	テンコロ <sup>25</sup>	イエカラ	カルワ <sup>26</sup>
034 裏 02	手玉に [ci-ukotemkor] 娘を抱きかかえて、	とりて	寵愛 i=ekarkar wa	なざる
034 裏 03	バテキ	キロハ子 <sup>27</sup>	ウレシカ	アエ子
034 裏 04	此のみ patek そればかり	たのすみに kiroro ne 楽しみに	育てゞ ureska 育てる	見たところハ ayne うちに

<sup>21</sup> レイコレ: re(h)e 「～の名前」 kore 「～に…を与える」、あるいは「～に名前を付ける」という 2 項動詞の rekore か。ただし文法的には助詞の sekor を用いて、Okici sekor re(h)e kore/ rekore 「おきつという名前を授け」などとしたほうが良い箇所である。

<sup>22</sup> ホトエバ: 日本語の「呼ぶ」の発想でアイヌ語訳が付けられている。『沙流方言辞典』によれば、hotuypa は、「複数形の形だが一人にも用いられ」、「複数形は大声で声を長く引いて呼ばわることを表す」語であるが、ここはその意味で解釈しにくい。

<sup>23</sup> ニンカリ: 資料番号 28 では、「ニンガリ」と表記されている。

<sup>24</sup> シトキ: 「女性の正装するときの装身具の一つ、tamasay タマサイ〈首飾り玉連〉の前の中央から下げる金属製の円盤、模様をついた、昔の鏡の形をしたものが多い、直径 10 センナ前後のものから大きいものでは 15 センチぐらいのものもある」(『沙流方言辞典』より)

<sup>25</sup> チウコ テンコロ: temkoro 「～の(子どもを抱いている)ひざの上」(T) という名詞(所属形)と、temkor 「ほおよお(抱擁)[する]; 抱え[る]」(C 人) という 2 項動詞の 2 種があるようだが、後者の用法が明確ではない。このほか、村崎(1976)の樺太方言で ukotenkoro が見つかる。樺太に多い用法なのかもしれない。;《参考》『方言辞典』の「だ(抱)く」の項目では、(si-)temkoromare (幌)、temkorosma (美)、temkor nitata (旭)、temkoromare kisma (宗)、tenkorasi (樺 H)。

<sup>26</sup> イエカラ カルワ: i=ekarkar wa。ここの ekarkar は、前の ci- と共に用いられて「～をする」という意味を表す。4 人称目的格人称接辞の i= は「おきつ」のことを指して言っているようであるが、前後で「おきつ」は三人称で語られている。

<sup>27</sup> キロハ子: kiroro は「力」という意味。関連語の kiroroan は「楽しむ」という意味の 1 項動詞で、kiroro 「力」 an 「ある」ということから派生した語と考えられている。kiroro が単独で「楽しみ」と解釈される例は、上原熊次郎の『藻汐草』(〔写〕同)などに見られる。;《語解》kiroro 【名】楽しみ



034 裏 05	メノコ	ナンカテ <sup>28</sup>	コエキリ	シヤクベ <sup>29</sup>
034 裏 06	女の menoko 女の	奇なる事 [nankante] 美しさは	ならぶ koykirsak pe 並ぶ者がいないもの(となった)	ものなし
034 裏 07	エラマ	シリルエ <sup>30</sup>	ウハクテ <sup>31</sup>	アンナ <sup>32</sup>
034 裏 08	うつくしゑものに [eramasre] ruwe 美しいことに		くらべて upakte 比べ	見れは an na たなら(?),
034 裏 09	アマホ <sup>33</sup>	エブエケ	モト、リ <sup>34</sup>	ヲトブ <sup>35</sup>
034 裏 10	あやめの [apappo] あやめの	花の epuyke 花の	髪 [motontori] 結んだ	結ぶり otop 髪のも、
035 表 01	カルバ <sup>36</sup>	ニイテキ	エフエケ <sup>37</sup>	クツヨ <sup>38</sup>
035 表 02	桜下り [karinpa] 桜の	枝 niteki 木の枝、	花のよふな epuyke 花の	帯める kuci [o] 帯しめる

<sup>28</sup> ナンカテ：帯広方言に nankante 「美しい」(H) とある。t の前の n 音の有無が不明であることから推定形で表す。

<sup>29</sup> コエキリ シヤクベ：koykirsak は未詳だが、以下のように分析できる。；《語解》koykirsak【動 2】(<ko-ikir-sak ~に対して・並ぶもの・無い) ~に並ぶ者がいない。

<sup>30</sup> エラマ シリルエ：iramasure で、美しいという意味。八雲、沙流、宗谷(H) などでは報告があるが、『藻汐草』にも「イラマシユレ」(〔写〕同)で「美しい」という記載がある。浅井(1972)に、十勝や釧路に eramasure という形式があると報告されているが、具体的な事例が見つからない。樺太方言に eramasreno'an yoy horokewpo 「きれいな良い男」(村崎 2001: 122) という語形が報告されている。

<sup>31</sup> ウハクテ：資料番号 28 では、「ウバクテ」と表記されている。

<sup>32</sup> アンナ：「菊のかんざしみだれ髪」に計 6 回出て来る表現であるが、「アン」の用法が未詳。本来は、4 人称人称接辞の =an (1 項動詞=an で「人(／私達)が～する」という意味を表す)か、1 項動詞の an (「～がある／いる。’)のどちらかで取りたいところだが、どちらも決め難い。拍を合わせるなど、一種の技法として挿入されていると考えた方が良いかもしれない。

<sup>33</sup> アマホ：『方言辞典』に、apappo で「(山アヤメの花、その他植えたものの花)」という記述あり。美幌方言。

<sup>34</sup> モト、リ：日本語の髻(もとどり)。アイヌ語に入ると濁音の関係で motontori になる。表記が揺れるため推定形で表した。

<sup>35</sup> ヲトブ：otop は概念形。所属形「～の髪」は otopi である。

<sup>36</sup> 原典では「リ」のような文字を墨で消して「バ」と右に書き直している。辞書等で報告のある形は、karinpa 「桜の木の皮」であるが、要検討である。

<sup>37</sup> エフエケ：資料番号 28 では、「エブエケ」と表記されている。

<sup>38</sup> クツヨ：「ヨ」に対する解釈の可能性は、中川(2013、私信)による。；《参考》kut-o-sintoko 「帯を締めた行器＝樽」。

035 表 03	チウック	コバケタ	ユワトベニ <sup>39</sup>	ハム
035 表 04	秋に cuk 秋	をよんで kopake ta 近く、	紅葉の iwatopeni 紅葉の	いろのよふな hamu 葉、
035 表 05	アブカ	ホトエバ	ノマンヘ <sup>40</sup>	コラツ
035 表 06	男鹿 apka 雄鹿	よぶ hotuypa を呼ぶ	め鹿の [nomanpe] 雌鹿の	ことくゝる koraci ごとく、
035 表 07	ヲッカエ	エコカレ <sup>41</sup>	ユニンカ <sup>42</sup>	メノコ
035 表 08	男衆 okkay 男を	くるわする [ikokari] 巻き付けて	こまった [iyuninka] 怪我させる	女たよ menoko 女(であった)。
035 表 09	ニシバ <sup>43</sup>	エヨコテ <sup>44</sup>	ホン シヤモ	エキリ
035 表 10	旦那 nispa 旦那に	家来 eyokote かしづく	見ならへの小供 pon samo 若い和人の	衆の ikiri 衆の
035 裏 01	ヲシケ	ウトマシ	セイザコ	シシヤモ
035 裏 02	中に oske 中に	まつわる utumasa 混ざる	清三子 Seiza-ko 清三子	といふ和人 sisam (という)和人は
035 裏 03	エラ、	アエカブ	トノブリ	コロベ
035 裏 04	あなとら erara そんなことができると思えない、	れぬ aykap	役人のよふな tono puri 殿方らしき	身持 kor pe 態度の者、

<sup>39</sup> ユワトベニ：推定形は [iwatopeni]。「ユ」はアクセント無しの母音のため弱化したものと考えられる。原文和訳によると「紅葉（こうよう）」のことを言っているが、アイヌ語から考えるならば「紅葉（モミジ）」に近い。iwatopeni に関する辞書等の記述は以下の通り：「ソネ（アカシデ）」（沙 Ky）、「メエグツカエデ、ハリチワカエデ、ヤマモミジ、オガラバナ」（C 植）。

<sup>40</sup> ノマンヘ：辞書等で報告のある形は momanpe だが、推定形は [nomanpe] とした。要検討。

<sup>41</sup> エコカレ：kokari は、「...の所に群がる。」（沙 T）という 2 項動詞と、「...に...を巻きつける、...を...にくるむ。」（沙 T）という 3 項動詞がある。意味的には前者のほうが良さそうだが、接頭辞の i- が付加されると項がひとつ減ってしまう。2 項動詞としてとるなら後者であろうか。；《語解》ikokari 【動 2】 (< i-ko-kari もの・～に対して・～を回る) ～を巻きつける。；《参考》ikokarkari 【他動】 [i-ko-kar-kar-i もの・に・(回る/回すことを表す擬態の語根)・(重複)・(他動詞形成)] ...をものにくるむ。

<sup>42</sup> ユニンカ：『千歳方言辞典』の iunin の項目で「人称接辞が語頭に接続する時にはユニン yunin という形をとる。」という記述があるが、ここでは人称接辞がつかないため、推定形は [iyuninka] 「～を痛める」とした。

<sup>43</sup> ニシバ：資料番号 28 では、「ニシハ」と表記されている。

<sup>44</sup> エヨコテ：白糠方言に eyokote という記述があるが、語義未詳。hekote 「～にかしづく」かもしれない。；《参考》「kimun otopi/ tukani sum-sum/ re kani sum-sum/ an=e-yokote 彼女の御髪には（神女特有の）／二つのきれいな波状／三つのきれいな波状が／ついており」（四宅ヤエ口述「うら若いシヌタブカビとの話」）（財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1986: 222）

035 裏 05	カンビ	ソロバン	イハカシ <sup>45</sup>	クル子
035 裏 06	よみかき kampi 読み書き、	算用 SOROBAN ソロバン	教える epakas を教える	者た kur ne 者である
035 裏 07	ヲベカ <sup>46</sup>	ケウトモ	ナンカテ <sup>47</sup>	シシヤモ
035 裏 08	直な [owpeka] 実直な	こゝろいき kewtumu 心持、	美男の [nankante] 美男の	和人 sisam 和人(であった)。
035 裏 09	パウツ	コバケタ	シイシヤク	ヲキツ
035 裏 10	いろの pawci 色気を	氣ざしも kopake ta 傍に	頃能 sisak (頃よく)熟した	おきつ Okici おきつが、
036 表 01	セイザ	シユイ	ウエトレヌ <sup>48</sup>	アエ子
036 表 02	清三 Seiza 清三と	度々 suy suy 度々	恋しを ueturen 一つになる	かわし ayne うちに
036 表 03	シカビ <sup>49</sup>	ケウトモ	エコニ子	ボコノ
036 表 04	ほれた sikapi ほれた	こゝろは kewtumu 心は	病氣の ikoni ne 病気である	よふに pokon ように、
036 表 05	ヲエラ	コヤクシ <sup>50</sup>	ウエラエ	ヌケシ <sup>51</sup>
036 表 06	わすれ oyra 忘れ	かたなひ koyakus 切れず、	恋に ueraye 互いに知らぬ	こかれる [nuykes]. こともできない。

<sup>45</sup> イハカシ：資料番号 28 では、「イバカシ」と表記されている。推定形は [epakas] だが、これは名詞であり、「～に…を教える」という意であれば通常 epakasnu が用いられる。これが動詞として記載されている代表的な辞書が『藻汐草』の「教ゆ イバカシ」([写] 同) である。静内、帯広、十勝、美幌、釧路などの道東地方では、ecakoko が「教える」という意味で用いられる傾向があり、この epakas という語形は『藻汐草』から広まったものではないかと筆者は疑っている。

<sup>46</sup> ヲベカ：opeka という語形の報告はなく、ここでは、owpeka 「まっすぐである」を参考に推定形 [owpeka] を採用した。

<sup>47</sup> ナンカテ：034 裏 05 の註を参照のこと。

<sup>48</sup> ウエトレヌ：《語解》ueturen 【動 2】 (<u-e-turen 互い・～で・～に伴う) ～と一つになる。；《参考》ueturen 「対 (つい)」(沙 Ky)。

<sup>49</sup> シカビ：語義未詳。「チャコルベ」にも出て来る語形で、浅井(1972) は「\*sikapi, \*sikap あるいは \*sikape などという (～にほれる、～を好きになる) の意味の不完動詞か」と考えられるが、該当する形式が見当たらない。「シカビとは好きになることだと思ふ」と説明して下さった方もある(砂沢クラ氏) ので sikapi (ほれる) としておく。；《参考》狩野(2007) に、wenpe uesikapi で「素行のよくない者同志相親しむ。」とある。

<sup>50</sup> コヤクシ：koyakus は樺太 (山田ハヨ氏など) に見られる語形。その他の方言では koyaykus という語形で報告されている。

<sup>51</sup> ウエラエ ヌケシ：和訳文に一致する語形が見つからない。ueraye nuykes であろうか。

036 表 07	モマノ <sup>52</sup>	ウコイタク	ウトロカ	イシヤマ
036 表 08	ながく [mona no] 座って(?)	咄しする ukoitak 互いに話をする	間も uturu ka 間も	なし isam 無く、
036 表 09	ビノホ <sup>53</sup>	ヌエナノ	チヌイ	カンヒ <sup>54</sup>
036 表 10	しのひ [pinotpo] 忍び	かくすて [nuyna] no 隠して	ふみ [ci-nuye] 手紙を	とり kampi ウタサ かわし utasa 交わし、
036 裏 01	マツ子	アंक子	ホク子カ	キクニ
036 裏 02	女房に maci ne 妻に	なります an ku=ne. なります。	夫トに hoku ne ka 夫にも	なります ki kuni. なりますと。
036 裏 03	エンカ	子ーベカ <sup>55</sup>	シヨモ	ヲビツグニ
036 裏 04	かならず inkaneypeka 決して	∟	はなれぬ somo 手から離しませんと。	はなさぬ opici kuni.
036 裏 05	カンビ	レコロヘ	コンカニ	シリ子
036 裏 06	記証文 kampi カンビ(証文)という物は <sup>56</sup> 、	といふハ rekor pe	金の konkani 金の	かわり siri ne ように
036 裏 07	ニシテ	ケウトモ	アシンベ <sup>57</sup>	イコロ
036 裏 08	堅ひ niste 堅い	こゝろいき kewtumu 心持は	証約の asinpe 証約の	宝 ikor. 宝。
036 裏 09	アニレ	ノエカタ	ケムバン	ヲマレ
036 裏 10	自分の an=re 自分の名を	名書た上サ nuye ka ta 書いた上に	血判 kem BAN 血判を	おして omare. 入れた。

<sup>52</sup> モマノ：和訳は「ながし」にも見え、moman に「流れる」という意味があるが、前後の文脈と合わない。カナ表記に近いのは mosmano 「黙って」であるが、これも和訳から少し飛躍をしなければならぬ。もし「ながし」が、秋田弁の「ながまる（横になってゆっくりする意）」という語と何かしらの関連性を持つとすれば、mona no 「座って」（中川 2013、私信）が限りなく近い形である。よって、これを採用することにした；《参考》monaa 「座る」（静 Ok）。

<sup>53</sup> ビノホ：『バッチェラー辞典』に「Pinotpo, ピノツポ, 窃カニ. adv. By stealth.」とあり、樺太方言に pinohpo という語形も見られる。；《語解》pinotpo 【副】 (<pinot-po 密かに・指小辞) 忍びやかに。こっそりと。密かに。

<sup>54</sup> チヌイ カンヒ：ci-nuye kampi を逐語訳すると「文字が書かれた紙」であり、「ふみ、手紙」を言い表したものと言える。

<sup>55</sup> エンカ 子ーベカ：inkaneypeka は、釧路や旭川で見られる語形。

<sup>56</sup> 逐語訳すると、「カンビ（証文）の名を持つ物」である。

<sup>57</sup> アシンベ：asinpe は、「償いの品」という意味だが、ここでは「証約」という意味で用いられている。

037 表 01	タン子	チウブ <sup>58</sup>	トタ	ウカマレ <sup>59</sup>	ウラム <sup>60</sup>
037 表 02	永イ tanne ながい	月 cup 月	日に to ta 日に	重る [ukaomare] 重ねる	不義 uramu 不義、
037 表 03	子ンタ	エシヨ	エタク	ミツハボ	バシテ
037 表 04	たれか nenta 誰が	告 isoitak 語ったか、	るか	父母 mici hapo 父母が	おぼひ paste 気が付いて、
037 表 05	タンへ <sup>61</sup>	ユルシカ <sup>62</sup>	キマテク		トラノ <sup>63</sup>
037 表 06	是を tanpe これに	立服 iruska 立腹し、	お急き kimatek 急ぎ		なから turano ながら、
037 表 07	ヲキツ	ホシケノ	アノ	ヲシヤ	ガンケ <sup>64</sup>
037 表 08	おきつ Okici おきつが	さきに hoskino 先に	お呼 an=osakanke 呼び出され、	いた	される
037 表 09	ハウエ	ヲニタシヤ <sup>65</sup>	コバケタ		サヌケ
037 表 10	声に hawe その声	しとふて onitasa すぐに	おそばへ kopake ta お側へ		でれハ san [h_ike] 上がると、
037 裏 01	ヲキツ	クエ付	ヒリカノ <sup>66</sup>		エヌヤ
037 裏 02	おきつ “Okici, 「おきつ、	わしのいふ事 ku=ye ciki わしが言うことを、	能聞 pirkano よく		なされ inu ya. 聞きなさい。

<sup>58</sup> チウブ：「チウブ」の写し間違いか。

<sup>59</sup> ウカマレ：ukaomare であろうか。尚、ukaomare は 2 項動詞であるため、ここでは「重ねる」と訳した。

<sup>60</sup> ウラム：uramu は、『知里人間編』の「§315. おごお(交合)；女接；交尾；性交」の項に、「uramu [u-ra-mu ウラム] [<u(お互を)+ramu(思う)?] 《東シズナイ、ビホロ、クッシャロ》」とあり、これを採用した。

<sup>61</sup> タンへ：資料番号 28 では、「タンベ」と表記されている。

<sup>62</sup> ユルシカ：「ユ」はアクセントの無い母音の i を示すと考えられるが、iruska は「怒る」という 1 項動詞であるため、本来は「～に怒る」という 2 項動詞の ruska を使用する箇所。

<sup>63</sup> トラノ：以下の用法を適用する。加賀家文書の中では、比較的よく使われる。；turano【後副】(動詞と共に用いられて)～しながら。

<sup>64</sup> アノ ヲシヤ ガンケ：an=osakanke で「呼び出される」であろうか。osakanke については、『パチェラー辞典』に「Osakange, オサカング, 呼ビ寄セル. v.t. To send one person to another. To call to one. To bid.」と記載されている。また、樺太にもよく見られる語形である。

<sup>65</sup> ヲニタシヤ：《参考》onitasa は「すぐに」(旭 Ot) や、「見落ス」「To miss. To pass by without seeing.」(B) という意味で報告されている。これは恐らく onuytasa が約まった形であり、中川(2013、私信)によると、onuytasa は、「代わりに」というのが基本的な意味で、hawe onuytasa 「その声と入れ代りに」ということで、「すぐに」という意味になるのではないかということであった。

<sup>66</sup> ヒリカノ：資料番号 28 では、「ピリカノ」と表記されている。

037 裏 03	エホク	サントボ <sup>67</sup>	セイザ	トラノ
037 裏 04	売 ehok 売	店の santopo 店の	清三との Seiza 清三	こど turano との
037 裏 05	子ブタ	ヲロシベ <sup>68</sup>	クキシヤラ	ヲシマ
037 裏 06	なんたが nepta 何だかの	不義らしへ事 oruspe 話が	わしが耳に ku=kisara わしの耳に	はへた osma. 入った。
037 裏 07	アンベ	シヨモ子ヤ	エツ ヤエ	バレヤ <sup>69</sup>
037 裏 08	あるか anpe 事実	なゑか somo ne ya じゃないのか	そこ 白状 eci=[yay(y)epare] ya.” お前たち白状しなさい。」	しやれや
037 裏 09	ヲキツ	シカシケ	エラメシ <sup>70</sup>	ボコノ
037 裏 10	おきつ Okici おきつは	包かくすて sikasike しらばくれて、	しらぬ [eramesi] 知らぬ	ふりして pokon ように
038 表 01	ナヌカ	シコキル <sup>71</sup>	エ子ハワシ	アニ
038 表 02	かを nanu ka 顔も	片むけ sikokiru そちらへ向けて	返答 ene hawas=an h <sub>i</sub> , このように言った。	するに
038 表 03	チャラム	シユイカレ <sup>72</sup>	エダラエ <sup>73</sup>	エビシ
038 表 04	うたかへ “[caramsuykare] 「疑われた	なさる	推慮の [etaraye] 推測の(?),	御せんき ipisi 計算の

<sup>67</sup> サントボ: usanto で「前小屋」(Kb) という報告あり。santo も同様の意味で使われている可能性が高い。-po は指小辞。

<sup>68</sup> ヲロシベ: 資料番号 28 では、「ヲロシへ」と表記されている。

<sup>69</sup> ヤエバレヤ: yay(y)epare は語義未詳。原文和訳は「白状する」。; 《語解》yay(y)epare 【動 1】 (<yay-ye-pa-re 自分・言う・複数・使役=自分達に言わせる) 白状する。(当解釈の可能性は、中川(2013、私信)によるものである。): 《参考》『方言辞典』に yaypareitak で「つぶやく」(幌 H) とある。

<sup>70</sup> エラメシ: eramesi は語義未詳。辞書などで報告されている形では、名寄方言の eramesikari 「知らない」「わからない」(H) が最も近い。これも、『藻汐草』の「倦む イラメシ」([写] 同) による語形かもしれない。

<sup>71</sup> ナヌカ シコキル: nanu ka sikokiru であろうか。sikokiru は未詳だが、kokiru が 3 項動詞で、「～を～へ向ける」(静 Ok) と解釈されることを考慮すれば、以下のように分析可能; sikokiru 【動 2】 (<si-ko-kiru 自分・～へ・を向ける) ～へ向く、～の方に向く。

<sup>72</sup> チャラム シユイカレ: 語義未詳。久保寺辞典稿に pasuikare で「疑ふ」とある。pa- は道東では ca- になるため、casuykare という語形もありそうである。ci=eramsukare に関係する語かもしれない。eramsukare は十勝(本別)に見られる語形。

<sup>73</sup> エダラエ: etaraye は未出。原文和訳から「推測する」や「推察する」という意味が考えられる。類似する語形に「Chataraye, チャタライエ, 推察スル. v.t. To surmise. To guess.」(B) や、「Pataraye, パタライエ, 推量スル. v.t. To surmise. To guess.」(B) がある。

038 表 05	エシヤマ	ヲロシベ	子ニウイ	トレンヤ
038 表 06	なゑ事 isam 無い	なれば oruspe. 話よ。	何と挨拶に nen ueturen ya?" 誰が清三と一つになるというの？」	て及やと
038 表 07	アンコ <sup>74</sup>	ホブニワ	ヲヤケタ	ヲマン
038 表 08	つしと an=kohopuni wa (おきつは)対して立ち上がり、	立上り	わき方江 oyake ta 別の方に	行 oman. 行った。
038 表 09	ヲロワ	セイザコ	ホトエバ	アンナ
038 表 10	夫方 orowa それから	清三子 Seiza-ko 清三子	呼出し hotuypa (と旦那が)呼び出しなさる。	なさる an na.
038 裏 01	セイザ	キマテク	ソロバン	カンビ
038 裏 02	清三 Seiza 清三は	急き kimatek 急いで	そろはん SOROBAN ソロバン(の)	帳めん kampi 帳面を
038 裏 03	エタラ	カエキノ	ウカヲカ	シヨモキ
038 裏 04	そつ etarka iki no 粗末にして	こつに	片付も ukao ka 片づけも	せずに somo ki, せず、
038 裏 05	ニシハ	マツトラ	アノロク <sup>75</sup>	シヤマタ
038 裏 06	旦那 nispa 旦那、	御内室 maci tura 妻が共に	御揃ひの an rok いて座り、	前江 sama ta その側へ
038 裏 07	ホトエ	エレンカ	トモコキ	アウイヌ <sup>76</sup>
038 裏 08	御召の hotuy 呼ぶ	御用 irenka 御用に	なんて [tomo kokiaynu] 忠実に従った。	御座ります

<sup>74</sup> アンコ : an ko は、語義未詳。後に続く hopuni と合わせて、an=kohopuni とした。043 裏 05 にも同様の表現あり。

<sup>75</sup> マツトラ アノロク : 『バチューラー辞典』には、「Tura-an, ツラアン, 伴フ. v.i. To be with. To accompany.」と表記されているが、加賀家文書では、~wa an 「~している」というのが、しばしば wa が脱落した形で出てくることがあり、原文のカタカナ表記も「トラ」と「アノ」が分かち書きされていることから、この可能性が高い。 an no rok という可能性もある。

<sup>76</sup> トモコキ アウイヌ : 報告されている形は tomo kokanu であるが、佐藤(2005) で「\*kokianu のような形式がかつてあり、古い形式であったことを示している可能性がある」と指摘されている。その註には「北原次郎太氏により、八重九郎の資料に kokiaynu という形式があることを教えられた」ともある。加賀家文書版『藻汐草 [写]』に「重んず イトモコキアエヌ」(原本の『藻汐草』では「イトモコキアエヌ」と見つかる。本稿では、「アウイヌ」というカナ表記から、推定形を [kokiaynu] にしたが、要検討である。

038 裏 09	ニシハ	セイザコ	ニテエバ <sup>77</sup>	トラノ
038 裏 10	旦那 nispā 旦那は	清三子 Seiza-ko 清三子を	きつと [nitewpa] 転倒させる(?)	白眼つけて turano と同時に、
039 表 01	セイザ	ホトエバ	イサラレ	エナ、 <sup>78</sup>
039 表 02	清三 “Seiza, 「清三よ、	呼のは hotuypa (お前を)呼んだ	軽るき事て h_i sawre ことは軽くは	なへぞ [ina] na. ないぞ。
039 表 03	シヨモカ	シカルン <sup>79</sup>	コバウツ	ロッパ
039 表 04	おもひも somo ka 思いもよらず、	よらぬ sikarun	不義いたつら kopawci (娘と)不義をした	ものめ rok pe. 者め。
039 表 05	ヲキツ	エマツ子	子ニワノ	コレヤ
039 表 06	おきつ Okici おきつを	其許の女房に e=maci ne お前の妻として	誰が nen wano 誰が	呉だ kore ya. くれたのか。
039 表 07	子ンタ	ハウトロ <sup>80</sup>	ウムレツ <sup>81</sup>	クニ子
039 表 08	何者 nenta 誰が	仲達して hawtur 仲人で	夫婦になる umurek 夫婦になる	積りた kuni ne. つもりだ。
039 表 09	ウサイ <sup>82</sup>	エレンカ	コヌブル	ヲワツ <sup>83</sup>
039 表 10	さま\ / なる usay 様々な	我が俣 irenka 我が俣、	おのぼれ konupuru 気に入られた	蛙屋ろ owat. 蛙よ。

<sup>77</sup> ニテエバ: nitewpa であろうか。語義未詳。原文和訳によると、「睨む」という意味の 1 項動詞として用いられているようであるが不明。『パチエラー辞典』では、「Koniteupa, コニテウパ, 顛倒する。v.t. To set upside down.」とある。

<sup>78</sup> エナ、: 語義未詳。「エナ」の推定形を [ina] としたのは、日本語の「否」の可能性を考慮したため。

<sup>79</sup> シカルン: sikarun は 1 項動詞であり、「始終思っている」、「思出す」、「記憶する」(Kb) だが、2 項動詞の esikarun の方が頻出語彙である。

<sup>80</sup> ハウトロ: 《参考》 hawtur un kur は、「仲介の労をとる。ちゆうさい人。仲にたつて話をとめる人」(Kb)。

<sup>81</sup> ウムレツ クニ子: 資料番号 28 では「ウムレツ」の「ツ」が小さく表記されている。umurek kunine とすると、kunine の前には動詞が必要になるはずであるから、本来なら umurek ne kunine と表記されていて欲しいところである。

<sup>82</sup> ウサイ: 釧路方言等では ka が kay という語形で現れるため、「色々な」という意味の usa が、ここでは usay という語形で現れていたとしてもおかしくない。

<sup>83</sup> ヲワツ: owat という語形は、様似、近文、伏古、春採、屈斜路、美幌、名寄(C 動)に見つかる。



039 裏 01	エンツ	ウエンテ	クラシハ <sup>84</sup>	ルエナ
039 裏 02	此方共 [enci=wentekuraspa] わしは馬鹿にされた	なへ	つけ(かしろ <sup>85</sup> )にするのたな	ruwe na. のだな。
039 裏 03	タンベ	シユト子ワ	タンツセ	ウシヨロ <sup>86</sup>
039 裏 04	是元として tanpe これを	sutu ne wa 元として、	此家の tan cise この家	内に [ussoro] の内に
039 裏 05	アンテ	アエカフ	アニツセ <sup>87</sup>	ヲレ子
039 裏 06	置事ならぬ ante 置くことはできない。	aykap.	其方 an=cise そなたの家	内へも or ene へ
039 裏 07	カンビ	シカマレ <sup>88</sup>	トナシノ	ホブニ
039 裏 08	書状を kampi 書状を	差添ひ遣ス sikamare. のちにやる。	早々 tunasno 早く	罷立てゆけ hopuni. 腰を上げなさい。
039 裏 09	バテキ	ウヌカラ <sup>89</sup>	サランハ	アンナ
039 裏 10	是きりの patek これきりの	對めん unukar, 対面、	暇乞ひ saranpa さよならだ。」	だぞ an na.”
040 表 01	ヨキ子 <sup>90</sup>	カッチヤマ	ヤエ子ゴナ	カラ <sup>91</sup>
040 表 02	耻辱受 okne 悲しむ	しぞくなへ katcama 様子は	自分 [yaynekonnakar] 自制して(?)	面目なへ事だ

<sup>84</sup> ウエンテ クラシハ: wentekuraspa は語義未詳。類似する単語に wenkuraspa 「軽蔑する, 馬鹿にする, 蔑む」(Ky) があるので、この意味を採用した。

<sup>85</sup> 原典では「つけ」の左横に「かしろ」とある。資料番号 28 では、「ふみつけにするのたな」の左横に「なへかしろ」とあり、同様のことを書きたかったものと考えられる。

<sup>86</sup> ウシヨロ: ussor, -o は、「(～の) ふところ」という意。『方言辞典』によると、美幌、旭川、名寄に見つかる語形。

<sup>87</sup> アニツセ: 文法的には an=kor cise であって欲しい箇所。

<sup>88</sup> シカマレ: 語義未詳。『沙流方言辞典』には「sikamare【自動】[si-kama-re 自分を・またぐ・させる] (日にちなどの) 間をとばす、間があく。」とあるが、「時間を置いて送る」という意味であろうか。『藻汐草』には、「納む 又 蓄也 シカシマ▲シカマレ」(〔写〕「納む 又 貯也 シカシマ○シカカレ」)と書かれてあり、2項動詞としては、こちらのほうが適切のようにも見える。

<sup>89</sup> ウヌカラ: unukar は1項動詞だが、1項動詞はしばしば名詞としても用いられ、ここではまさにその扱いを受けている。

<sup>90</sup> ヨキネ: 原典の字は「ヲ」ではなく「ヨ」であるが、語頭の「ヨ」はしばしば o で実現できることがあるため、即座に写し間違いとは断定できない。:《参考》okne は、「悲しげである」(歳 N)、「しおれる」、「ふさぎこむ」(沙 Ky) という意味の1項動詞。

<sup>91</sup> ヤエ子ゴナ カラ: 「ナ」の前にあった子音 n が音節数の関係で脱落したか、表記されなかった可能性がある。「謙遜する」や「謙虚にする」、「つつましやかにする」という意味か。;《参考》『静内方言語彙集』によると、yaynekonnakar は、用例数1で意味未詳。『パッチェラー辞書』では、「Yainekonnakare, ヤイネコンナカレ, 謙讓スル. v.i. To make humble.」。

040 表 03	アンベ	ヲロシベ	ヤエラミ	キツカ <sup>92</sup>
040 表 04	実に anpe 事実	有争なれば oruspe である話(ならと)	恐れかし [yayramkikkar_] あきらめ、	こまって
040 表 05	イタッコ	サマノ <sup>93</sup>	ヤヨ ヲロ	カレノ <sup>94</sup>
040 表 06	ものいふ争なく itak [koysamno] その話に言うことも無く		しを\/ [yayorkare] no (清三は)しおしおとして(?),	として
040 表 07	ヲロウ <sup>95</sup>	ヲツタラ	ホブンハ	アエ子
040 表 08	其場を [orowa] 其処から	静に [ratcitarā] 静かに	立て hopunpa 腰を上げる	見たが ayne と、
040 表 09	ウタレ	トモタカ	ヤエカト <sup>96</sup>	ウエン
040 表 10	傍輩の utari 仲間の	前江 tomo ta ka 方面でも	ぶのわるひ yaykatuwen きまりが悪い(ので)	争
040 裏 01	トンボ	ヲシケタ	アノ ツシ	トラノ
040 裏 02	部屋の tumpu 部屋の	内江はへり oske ta 中に	なき an, cis いて、泣き	ながら turano ながら
040 裏 03	ホブニ	エトコタ	シブンハ <sup>97</sup>	カトワ
040 裏 04	出立 hopuni 出で立ち	前の etoko ta 前の	まかなゑ sipunpa 身支度する	ぶり katu wa 様子から(は)
040 裏 05	クン子	ヲモンベ	ヲコラツ	ホシ子
040 裏 06	こんの kunne 黒い	もゝひき omonpe ももひき	をなじく ukoraci に似た	脚はん hos ne 脚絆で

<sup>92</sup> ヤエラミ キツカ: yayramkikkar 「やめてしまう」、「あきらめる」(沙 Ky) であろうか。『静内方言語彙集』によると、「yayramkipkar とのあいだで語形が揺れている」とあり、yayramkipkar であった可能性も否定できない。

<sup>93</sup> イタッコ サマノ: 「コサマノ」は未詳。koysamno か。; 《参考》指小辞の -po がついた koysamnopo は、「[雅]...が全然なく」(T) という意。

<sup>94</sup> ヤヨヲロカレノ: 推定形として [yayorkare] no を採用したが、語義未詳。; 《語解》yayorkare 【動 1】(<yay-(h)orka-re 自分・逆に・させる) しおしおとする(あきらめる)。; 《参考》「ram(u) horkare 【連他動】[(...の) 心・を逆にさせる] (人) にあきらめさせる」(沙 T)

<sup>95</sup> ヲロウ: 「ウ」は「ワ」の誤りか。和訳を参考に、推定形 [orowa] とした。

<sup>96</sup> ヤエカト<sup>96</sup>: 原典では、「ト」の縦線が長く伸びているようにも見えるが、一度切れていることから長音符として翻刻した。資料番号 28 では、長音符なしの「ヤエカト」と表記されている。

<sup>97</sup> シブンハ: sipunpa は、白糠(四宅ヤエ氏)において「身支度する」という意味で用いられる。沙流方言では sipinpa (T)。

040 裏 07	クン子	テバケリ <sup>98</sup>	カンビ アト	ワラツ <sup>99</sup>
040 裏 08	こんの kunne 黒い	わらじ拭 tepakeri わらじ掛、	紙結の kampi atu 紙緒のわらじ。	わらじ waraci.
040 裏 09	タ子ボ	アシリカ <sup>100</sup>	ホブンハ	アンナ
040 裏 10	今こそ “tanepo 「今まさに	ほんに [asirka] 本当に	出立 hopunpa 出発するぞ。」	するが an na.”
041 表 01	ニシハ	コハケタ	ケプトロ <sup>101</sup>	ラツケ <sup>102</sup>
041 表 02	旦那の nispa 旦那の	前にて kopaketa 前で	なつきを keputuru 額が	さげる [ratki] 下がり、
041 表 03	テキカ	エシチウイ <sup>103</sup>	エウゴビ	イタク
041 表 04	手を teki ka 手も	つゑて [esicuy] ついて	わかれを eukopi 別れの	申上る itak 言葉を申し上げた。
041 表 05	チセ コロ	クル	ウムレツ	カモエ
041 表 06	おんあるじ “cise kor kur 「家の主、		御夫婦 umurek 御夫婦	さま kamuy 様。
041 表 07	シタコ <sup>104</sup>	タン子ハ	ウボコル	シリ子
041 表 08	長ひ [sitakko] 長い間、	年月 tanne pa 長い年に	親子の upokor 親子	よふに siri ne. の様になりました。

<sup>98</sup> テバケリ : tepakeri は未出のため、以下のように解釈した ; tepakeri 【名】 (<tepa-keri ふんどし・靴) わらじ掛。

<sup>99</sup> カンビ アトワラツ : 逐語訳は「紙の紐のわらじ」。

<sup>100</sup> アシリカ : アイヌ語カナ表記に合わせて、[asirka] とした。 ; 《参考》 easirka 「本当に」、「それこそ」(沙 Ky)。樺太に asirika という語形がある。

<sup>101</sup> ケプトロ : keputur, -u は、美幌(H)、幌別、屈斜路(C人) で見つかる語形。

<sup>102</sup> ラツケ : ratki は「たれ下がる」や「つり下がる」という意味の 1 項動詞なので、逐語訳すると「額がたれ下がる」である。その後の手をつくという描写から、旦那の前で土下座をした様子を表していると考えられる。

<sup>103</sup> エシチウイ : [esicuy] としたが未詳。 ; 《参考》 ecuy 「突き刺す」(美 H)。

<sup>104</sup> シタコ タン子ハ : 《参考》 sitakkaneko 「しばらく(長い間)」(帯 H)、「長いあいだ」(静 Ok)。中川(2013、私信)によれば、沙流・千歳では setak-ko で「長い間」という意味であり、前述の帯広の語形 sitak-kane-ko の kane は挿入要素なので、道東で sitak-ko という形になってもおかしくないということであった。以上により、ここでは sitakko という語形を推定形として採用した。

041 表 09	シラム	シユイバナ <sup>105</sup>	カタヨロ	ツケナ <sup>106</sup>
041 表 10	儀り siramsuypa na 考えに考え、	深かなさけ	御めんどふに katayrotke na. 可愛がって頂きました。	相成ました
041 裏 01	アンベ	ヲエラカ	シヨモ アン	コロカ
041 裏 02	是を anpe (その)事実を	わすれました oyra ka 忘れたのでは	わけて なけ somo an 無い	れとも korka けれど、
041 裏 03	サラノ <sup>107</sup>	ヘラルエ <sup>108</sup>	ヲッチ子	ウマレ <sup>109</sup>
041 裏 04	明して sarano 明らかに	御礼も [eraryue] 御礼(?)は	恐れ otcine 至らないものです。	あり [omare].
041 裏 05	ツイシ	バックノ	ヤエライ	ケレナ
041 裏 06	なく丈 <sup>110</sup> cis 泣く	pakno くらい	あり yayraykere na. 有難いのです。	かたき
041 裏 07	カモイ	コバクン	アヌ ワ子	ヤキ子
041 裏 08	神々の kamuy 神々	御恵み kopak un の方へ	ありましたら [an=nu] wa ne 聞かれる のでした	yakne ら、
041 裏 09	クン子	タシヤニシ	ホブンバ	ヲカケ
041 裏 10	黒雲 kunne 黒い	逆立を tasa nis 逆立つ雲が	晴 hopunpa 飛んでいった	あけて okake 後
042 表 01	ホトボ	ベケレワ	エラルエバ <sup>111</sup>	ルシユイ
042 表 02	元の hotopo また	白雲にして pekere wa 白くなれば、	おがみ eraryupa 拝み	たひ rusuy たい(という)

<sup>105</sup> シラム シユイバナ：siramsuypa は yayko- という接頭辞のついた形が主に使用されるようだが、『久保寺辞典稿』に「shiram-shuipa」で「思ひめぐらす」と見つかる。人称接辞は無いが、旦那夫婦が主語になっていると考えるのが妥当であろう。

<sup>106</sup> カタヨロ ツケナ：ここも人称接辞は無いが、旦那夫婦が主語。

<sup>107</sup> サラノ：《語解》sarano【副】明らかに。；《参考》「Sara-no, サラノ, 明カ. adv. Openly.」(B)、saranoo 「はっきりした」(樺 H)。

<sup>108</sup> ヘラルエ：資料番号 28 では、「ベラルエ」と表記されている。042 表 01 の註を参照のこと。

<sup>109</sup> ウマレ：資料番号 28 では、「ウマシ」と表記されているが、語形の特定が難しい。

<sup>110</sup> 原典では「丈」に濁点がついているようにも見える。

<sup>111</sup> エラルエバ：041 裏 03 の「ヘラルエ」に複数を表す pa という助動詞が後続した形と考えられる。財団法人無形文化伝承保存会(1986: 251-253)によれば、白糠(四宅ヤエ氏)に koeraryupa という動詞が記録されている。koeraryupa は男性礼拝の手順のひとつであって、一礼して両手を胸にそってなでおろす動作のことを言う。

042 表 03	バテキ	エノンノ	サランバ	アンナ
042 表 04	是計り patek そればかりを	神願 <sub>ニ</sub> inonno, 祈り、	御暇乞ひ saranpa お別れ申し上げます。」	申上る an na.”
042 表 05	ヲキツ	セ、レケ <sup>112</sup>	チャコキ	アエヌ <sup>113</sup>
042 表 06	おきつ Okici おきつは	そゝろ se(s)serke すすり泣き、	涙にて [cakokiaynu] 立ち聞いた。	立聞する
042 表 07	セイザ	シコキル <sup>114</sup>	ウヌカラ	
042 表 08	清三 Seiza 清三は	片向 sikokiru そちらを向いて、	見合す unukar (おきつと)互いに目を見合わせ(ると)、	
042 表 09	ヲキツ	エタツ	ヨカアバ <sup>116</sup>	セシケ <sup>117</sup>
042 表 10	おきつ Okici おきつは	ものも itak 話しも	ゆわずに [koyssamno] せずに	跡戸 oka apa 後戸を
042 裏 01	子ブタ	チアラケ	クハボ子	アヌワ
042 裏 02	何 “nepta 「何か	女神 ci=arke 私の片割れが	我母 <sub>ニ</sub> ku=hapo ne 私の母に	なる an wa なって、
042 裏 03	子ブタ	シユ、ルマ <sup>118</sup>	クミツ子	アヌワ
042 裏 04	何 nepta 何か	男神 susuruma 砂埃が(?)	我父 <sub>ニ</sub> ku=mici ne 私の父に	なた an wa なって、

<sup>112</sup> セ、レケ : sesserke 「しくしく泣く、しゃくりあげて泣く、すすり泣き、むせぶ」(沙 Ky) であろう。幌別(C人)や旭川(H)でも同様の意味でこの語形が使用されるが、「ソオヤ(宗谷)でわ「ためいきする」の意に用いられる」(C人)という報告もある。この箇所は、資料番号28で「ツシカ子」と書いた後に訂正した跡がある。cis kane で、「泣きながら」という意味になる。

<sup>113</sup> チャコキ アエヌ : 辞書などには見つからない形だが、沙流や千歳では pakokanu となるところ。pa- 「口」は道東では ca- になるため、cakokanu で「立ち聞く」となると推測できる。また、kokanu は038裏07の註で見たように kokiaynu とした。

<sup>114</sup> シコキル : 038表01と同語。

<sup>115</sup> コサムノ : 040表05の「コサマノ」と同様。

<sup>116</sup> ヨカアバ : 「ヨ」はアクセントが無いため弱化したか、「ヲ」の写し間違いの可能性はある。

<sup>117</sup> セシケ : 「戸をたてる」は、「戸を閉める」とほぼ同義のものとして東北弁に残るが、もともとは戸の形態からくる言い回しであった。アイヌ語でもこれらを明確に使い分けており、『沙流方言辞典』によると、seske は「…をふさぐ、…をおおう(見えないようにふさぐ)、(窓や出入口)を閉じる(すだれ等の場合)」、「引き戸式の窓や戸、ふすま、ガラス戸やドアをしめることは asi アシ」とある。ここでは戸の形態まではわからないが、asi の意味で seske を用いている可能性もあるため注意が必要である。

<sup>118</sup> シユ、ルマ : 語義未詳。類似する語形に sisirima があり、ここでもその意味で解釈したが、『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②』(資料番号51)では「シハリマ」と出てくることに注意したい。

042 裏 05	ヨブケ	ケウトモ	エニツ子	カモイ
042 裏 06	強へ yupke 強い	御心行 kewtumu 心持	鬼神 enitne 鬼	のよふな kamuy 神(のように)、
042 裏 07	カモイ	ウワッテ	ウエカレ	コロカ
042 裏 08	神も kamuy 神が	多々 uwatte 大勢	集れ uekari 集まった	とも korka, けれど、
042 裏 09	シヤビリ <sup>119</sup>	カモエカ	エケ シユイ	コトモ
042 裏 10	仲に [sapir(i)] その陰の(?)	立神は kamuy ka 神も	不きげんと ikesuy 怒って出て行く	見へて kotom 様子で
043 表 01	セイザ	ニタッタ <sup>120</sup>	カモイカ	イシヤマ
043 表 02	清三 Seiza 清三を	とゝむる [nitata] 支える	神達て kamuy ka 神では	なゑぞ isam. 無い。
043 表 03	シヨソノ	ナニ $\setminus$	ヲマンテ	ヤキ子
043 表 04	いよ $\setminus$ sonno 本当に	此まゝ naninani すぐに	遣し omante (清三を)行かせる	ならバ [yakne], なら、
043 表 05	クワニ	ヨシヲシ <sup>121</sup>	ウノシバ	アンナ <sup>122</sup>
043 表 06	わしも kuani 私は、	跡より [uosuos] 後から	追かけ unospa 追いかけますよ。」(と)	ましよ an na.”
043 表 07	ヤエコ	ゴヤ $\setminus$ <sup>123</sup>	ヤエラム	ヲマレ <sup>124</sup>
043 表 08	自分 yaykokoyakoya ひとりぶつぶつとつぶやき、	つぶ やき	腹立考て yayramuomare それを不愉快に思つて、	

<sup>119</sup> シヤビリ：未詳。推定形 [sapir(i)] に近い語形も見つからない。ここでは sempiri 「～の影の」を参考にしたが、要検討である。

<sup>120</sup> ここはモーラを気にして4文字にした可能性があるため、推定形を [nitata] とした。

<sup>121</sup> ヨに比べてヲは縦棒を長く書く癖があり、また繰り返し記号も使われていないことから、ここは「ヨシヲシ」と表記されていると見て良い。044 表 05 は、明らかに「ヨシヨシ」と書かれている。

<sup>122</sup> ウノシバ アンナ：旭川に unospaan で「追う」「追いかける」(H) とあるが、ここは「アンナ」という句を別に考えた方が良さそうである。詳しくは 034 裏 07 の註を参照のこと。

<sup>123</sup> ヤエコ ゴヤ $\setminus$ ：yaykokoyakoya は未出だが、類似する語彙に、eparkoyakoya と parkoyakoya がある。前者が「まくし立てる」、「早口で言う」、「他人が聞いてもわからないことを口早に言う」(沙 Ky)、後者が「どもる」(幌 H)、「曖昧ニ言フ、クドクドイフ(単数)」(B) という意味である。これらを参考に、ここでは以下のように解釈した。；《語解》yaykokoyakoya【動 1】(<yay-ko-koya-koya 自分・に対して・ぶつぶつと言う・重複) ひとりぶつぶつとつぶやく。

<sup>124</sup> ヤエラム ヲマレ：『藻汐草』に「心憂(うい) ヤイラムヲマレ」([写]「ヤイラムヲマレ」) とある。語形は明確ではないが以下のように解釈した。；《語解》yayramuomare【動 2】(<yay-ramu-omare 自分・心・～を…に入れる) ～を不愉快に思う。

043 表 09	ヲロワ	シンナエ	ブリコロ	ヲキツ
043 表 10	是より orowa それから	こころかわりして sinnaye 別の	ふてる puri kor 心を持つ	おきつ Okici おきつ(は)、
043 裏 01	ヲン子キ <sup>125</sup>	コチャウシ	ヤエカマ <sup>126</sup>	トラノ
043 裏 02	母親の onneke 母親の	前通る <sub>二</sub> も kotca us 前を通るのも	足ぶみ yaykama 足踏みし	高く turano ながら
043 裏 03	アチャボ	コチャウシ	ビツツケ <sup>127</sup>	トラノ
043 裏 04	父親の acapo 父親の	前通る <sub>二</sub> も kotca us 前を通るのも、	けん\/ [pitke] けんけん(?)	として turano しながら
043 裏 05	アンコ	エキカト	エソポー	コラツ
043 裏 06	其身 an=koyki katu それを怒る様子は	ふりは	兎の isopo 兎の	ことし koraci ようで
043 裏 07	アエ子	与右衛門	ウムレツ	クル子
043 裏 08	か様に斗されて ayne (あった)あげく	Yoemon 与右衛門	夫婦 umurekkur ne 夫婦で	
043 裏 09	ベケレ	エレンカ	ウコラム	コロキ
043 裏 10	思案仕直し pekere 明るい	娘 <sub>二</sub> まかする irenka 約束	相談 ukoramkor ki 互いに相談して、	いたし
044 表 01	子ナエ <sup>128</sup>	コンカニ	シシヤクベ	エコロ
044 表 02	諸事 [nenaye] 諸事(?)、	金ぎんの konkani 黄金(の)	宝 sisak pe, 珍しい物、	まかせに ikor, 宝物を、
044 表 03	キクヤ	チセヲレ子	アシンヘ	サンケ
044 表 04	菊屋の KIKUYA 菊屋	家の方へ cise or ene 家の方へ	不礼申訳の asinpe 償いを	進物送 sanke 出す

<sup>125</sup> ヲンネキ: onneke「母親」は帯広・十勝(本別)の語形として確認できるほか、旭川で onneike が「親」(C人)という意味で用いられることも報告されている。この語形は伝蔵が自ら蒐集した可能性が高く、Fukazawa(2012)において取り上げた。

<sup>126</sup> ヤエカマ: yaykama は未出。原文和訳から「足踏みを(高く)する」であろうか。;《語解》yaykama 【動1】(<yay-kama 自分・をまたぐ) 足踏みを(高く)する。

<sup>127</sup> ビツツケ: 美幌方言では、pitke で(馬が)「蹴る」(H)とあり、関係があると推測される。

<sup>128</sup> 子ナエ: 語義未詳。原文和訳によると「諸事」という意。

044 表 05	シヨンコ	ヨシ\✓ <sup>129</sup>	セイザコ	エカリ <sup>130</sup>
044 表 06	飛脚 sonko 伝言を	追々遣して [uosuos] 追々(やって)	清三子 Seiza-ko 清三子を	貰ひ ekari もらい
044 表 07	ヲキツ	ウムレツ	ウエトモ	ヌカレ <sup>131</sup>
044 表 08	おきつ Okici おきつ	夫婦に umurek 夫婦に	縁組 uetomnukare. 結婚させた。	さする
044 表 09	ウトラ	ニシヤテク <sup>132</sup>	ウワエノ	コンナ <sup>133</sup>
044 表 10	互ひ utura 一緒に	よろこび nisatek 喜び	孝子と [uwaynukor_] na. 父を大切にした。	なりて
044 裏 01	ツセー	ナニ\✓	シッカマ	アエ子
044 裏 02	家を cise 家を	直に nani nani すぐに	譲らわれ sikkama 守るようになる	當世くらし ayne, と、
044 裏 03	シヨンタ	コロッコ	カナツカ	ヘトク
044 裏 04	男孫生れ sonta 赤子を	kor [ci=kor_] 持ち、私達の	女孫も kanaci ka 娘も	生れ hetuku 育ち、
044 裏 05	ニシバ	ニシヤテク	モエナク	ポコノ
044 裏 06	旦那 nispā 旦那	よろこび nisatek 喜び	目さました moynak 目覚めた	ことく pokon ごとく、
044 裏 07	アマツ	クワナツ <sup>134</sup>	アニ	イボ
044 裏 08	内室 [an=maci] 内室	女孫 kanaci 娘	自分 an= 自らの	ヲッカ 男 okkaypo 男の子

<sup>129</sup> ヨシ\✓ : 043 表 06 に「ヨシヲシ」があり同語と思われる。よって、ここも uosuos で「追々に」という副詞句として解釈した。

<sup>130</sup> エカリ : ekari は、原文和訳によると「～をもらう」と解釈できる。『方言辞典』によると、この意味で用いられるのは帯広や美幌の方言であり、名寄では「会う」、沙流では「回る」と報告されている。

<sup>131</sup> ウエトモ ヌカレ : utomnukare 「結婚させる」は幌別(H)で、 utomnukar 「結婚する」は、幌別、沙流(H)、静内(Ok)で見つかる語形。

<sup>132</sup> ニシヤテク : [nisatek] は語義未詳。原文和訳によると「喜ぶ」。

<sup>133</sup> ウワエノ コンナ : 《参考》「uwaynukor 【他動】 [u-w-aynukor 互い・(挿入音)・を尊敬/尊重する] 子どもも母も皆で父を「まてえに」(=大切に)して従っている。」(沙 T)。

<sup>134</sup> クワナツ : kanaci. 044 裏 03 では「カナツ」と出て来る語形。『知里人間編』に「《ビホロ》少女; 娘」という記載があるほか、アンジェリスの「第二蝦夷報告書」に「canachi」が記載されたり、江戸時代の文書によく出て来ることでも知られている。日本語から入った可能性がある。「クワ」と表記されている理由として、日本語秋田方言で /ka/ や /ga/ が、合拗音の /kwa/ や /gwa/ で発音されるということと関連している可能性がありそうである。



044 裏 09	トベニ <sup>135</sup>	ウシヤラエ	ヤイ	ミナ <sup>136</sup>	トラノ
044 裏 10	忒人 tupene 二人	とりわけ usaraye わけて	御笑 yayemina 微笑み(?)		なから turano ながら
045 表 01	ミツボ	テンコロ	テツテレ		ケレ <sup>137</sup>
045 表 02	孫を mitpo 孫を	手玉に [temkor] 抱いて	たの tetterekere 飛び跳ねさせているのでしたよ。		すみ
045 表 03	ヤンレ <sup>138</sup>				
045 表 04	なさるやんれし YANRE ヤンレ				

**謝辞:** 当翻刻は、秋葉實氏の翻刻資料(別海町郷土資料館所蔵)をもとに筆者(深澤)が原本と摺合せ、加筆・修正を施したものである。古文書解読の駆出しにも満たない筆者に翻刻資料の使用を快諾し、これで勉強したらいいと励ましの言葉をかけてくださった秋葉氏に敬意を表したい。また、別海町郷土資料館の石渡一人氏には資料・情報提供で大変お世話になった。アイヌ語の解釈では、中川裕先生からご助言頂いたほか(一部、中川(2013、私信)と記した)、諸先輩方からの有益な情報も反映されている。この場を借りて皆様に感謝申し上げる。

**略号:**

〈出典略号〉

(B) / 『バチエラー辞典』	バチエラー、ジョン『アイヌ・英・和辞典』第4版.
(C 植) / 『知里植物編』	知里真志保「植物編」『知里真志保著作集別巻 I: 分類アイヌ語辞典植物編・動物編』
(C 人) / 『知里人間編』	知里真志保『知里真志保著作集別巻 II: 分類アイヌ語辞典人間編』
(C 動) / 『知里動物編』	知里真志保「動物編」『知里真志保著作集別巻 I: 分類アイヌ語辞典植物編・動物編』
(H) / 『方言辞典』	服部四郎(編)『アイヌ語方言辞典』
(Kb) / 『久保寺辞典稿』	久保寺逸彦(編)『アイヌ語・日本語辞典稿』
(Ky) / 『萱野辞典』	萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』
(N) / 『千歳方言辞典』	中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』
(Ok) / 『静内方言語彙集』	奥田統己『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROM つき)』
(Ot) / 『旭川方言辞典』	太田満『旭川アイヌ語辞典』
(T) / 『沙流方言辞典』	田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』
『藻汐草』	上原熊次郎『藻汐草』(国書刊行会 影印本)
『藻汐草 [写]』	加賀伝蔵「蝦夷方言 藻汐草 [写]」

<sup>135</sup> トベニ: 『方言辞典』の「両方」の項目に、帯広で「tupenehe 《二つとも》」、美幌で「tupene 《二つとも》」とある。また、十勝(本別)にも tupene, tupenehe で「両方」(澤井 2006: 207)、旭川のキナラブック氏も tupenne で(クジラ) 2頭のことを表す(大塚(編訳) 1990: 261)。

<sup>136</sup> ヤイ ミナ: yayemina であろうか。語義未詳。

<sup>137</sup> テツテレ ケレ: tetterkere は2項動詞であり、tetterke の使役形と考えられる。tetterke には以下2つの意味があり、1つは「赤ん坊がヨチヨチ歩く(跳ぶような走るような歩き方なのでこう言う)」(沙 T)、もう1つは「ピョンピョン跳ぶ」(歳 N)である。ここでは、子どもをあやしている情景が描写されていると考えるのが自然なので、後者の使役形「～を飛び跳ねさせる」という意で解釈した。

<sup>138</sup> 資料番号 28 では、「アンコロナ」という文字が「ヤンレ」の右上に書かれている。

〈方言略号〉八：八雲/ 幌：幌別/ 沙：沙流/ 歳：千歳/ 静：静内/ 帯：帯広/ 本：本別/ 美：美幌/ 釧：釧路/ 旭：旭川、(近文)/ 名：名寄/ 宗：宗谷/ 樺：樺太/ 千：千島

#### 参考文献：

- 秋葉実（編）（1989）『北方史資料集成 第二巻 加賀家文書』札幌：北海道出版企画センター。  
浅井亨（1972）「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』6: 131-162. 札幌：北海道大学。  
上原熊次郎（1792）『藻汐草』（1972）『成田修一撰 アイヌ語資料叢書 藻汐草』東京：国書刊行会。）  
太田満（2005）『旭川アイヌ語辞典』旭川：アイヌ語研究所。  
大塚一美（編訳）（1990）『キナラブックロ伝 アイヌ民話全集』1. 札幌：北海道出版企画センター。  
奥田統己（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROMつき）』江別：札幌学院大学。  
加賀康三（1932）「おきつ清三戀の夜嵐」について『蝦夷往来』8. 札幌：尚古堂。  
加賀伝蔵筆録（1844～1863(?)）未発表資料「菊のかんざしみだれ髪」『御手本』加賀家文書館所蔵（資料番号 31）。  
———（年代不詳）未発表資料「菊のかんざしみだれ髪」『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①他』加賀家文書館所蔵（資料番号 28）。  
———（年代不詳）未発表資料『蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②』加賀家文書館所蔵（資料番号 51）。  
———（年代不詳）未発表資料『蝦夷方言 藻汐草 [写]』加賀家文書館所蔵（資料番号 49）。  
萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』東京：三省堂。  
狩野義美（2007）『新冠・静内地方のアイヌ語・郷土史話・随筆集—わが思い出—』私家版。  
久保寺逸彦（編）（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿』札幌：北海道文化財保護協会。  
財団法人アイヌ無形文化伝承保存会（1986）『語りの中の生活誌』札幌：財団法人アイヌ無形文化伝承保存会。  
佐藤知己（2005）「『申渡』のアイヌ語訳文に関する一考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』11. 札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター。  
澤井春美（2006）『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集：本別町・沢井トメノのアイヌ語』札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター。  
田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館。  
知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』札幌：北海道出版企画センター。  
———（1975）『知里真志保著作集別巻Ⅱ：分類アイヌ語辞典人間編』東京：平凡社。  
———（1976）『知里真志保著作集別巻Ⅰ：分類アイヌ語辞典植物編・動物編』東京：平凡社。  
中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館。  
バチェラー、ジョン（1938）『アイヌ・英・和辞典』第4版。東京：岩波書店。  
服部四郎（編）（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。  
別海町郷土資料館（2001）『別海町郷土資料館附属施設加賀家文書館展示解説』別海町：別海町郷土資料館。  
———（2002）「御手本」『加賀家文書 現代語訳版』2: 13-54. 別海町：別海町郷土資料館。  
———（2012）『別海町郷土資料館所蔵資料目録第1集 加賀家文書等資料目録Ⅰ』別海町：別海町郷土資料館。  
三浦佑之（2012）「ワオとマオ：小鳥になった人」『古代研究：列島の神話・文化・言語』79-104. 東京：青土社。  
村崎恭子（1976）『カラフトアイヌ語』東京：国書刊行会。  
———（2001）『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話』東京：草風館。  
Fukazawa, Mika (2012). The Distribution and Interpretation of Words for Parents—‘Mother’ and ‘Father’ in Ainu Dialects. *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*, pp. 89-98. Tokyo: Aoyama Gakuin University.

（ふかざわ みか・千葉大学人文社会科学研究所）

The Kaga Family's Archives – Reprint 1  
“Kiku-no Kanzashi Midare Gami” (Chrysanthemum Pin in Her Messy Hair)

FUKAZAWA Mika

Summary:

This text is a part of the writings in the Kaga family's archives. The writer is Kaga Denzoo (1804-1874), an interpreter between Ainu and Japanese, who worked in Nemuro (the western part of Hokkaido), Japan.

Outline of the story:

There was a man called Yoemon, who lived in Kyoto. He worked as a merchant, selling textiles and clothes and so on. Many Japanese gathered around him, then their voice sounded like White-bellied Green Pigeons were crying. Yoemon and his wife had only one daughter. They named and called her Okichi, and then brought her up carefully. As she grew up, she became the most beautiful girl.

Seiza was one Japanese young man who served under Yoemon. He was a gentle and faithful person, teaching literacy and arithmetic. Okichi fell in love and had relations with him. As soon as they noticed, her parents got angry and called her. Yoemon asked “Okichi, I heard you are on terms of intimacy with Seiza. Tell me whether it's true or not.” Okichi answered “It's pure speculation. Why would I love him?” In turn, Seiza was called and came to her parents obediently. “Who would give our daughter in marriage to you, Seiza? How were you going to marry her? You should get out of here. We are going to say good-bye to you,” Yoemon said. Seiza couldn't justify his actions. He was crying alone in a room, and then he went to say farewell to Yoemon and his wife. “My dear parents,” said Seiza, “You have taken good care of me for a long time. I don't forget your kindness, so that my eyes overflow with tears of gratitude. Now I will say good-bye to you.” Okichi, with sobs, was overhearing the conversation. Seiza looked at Okichi, but she close the back door without words.

After that, Okichi started hopping like a rabbit even in front of her parents, because she became angry with them. Finally, they gave up and talked about the relationship between Okichi and Seiza positively. They sent a gold treasure to his house and let him marry their daughter. Okichi and Seiza were pleased about that, and very dutiful to her parents. They had set up housekeeping, then they had a baby boy and a baby girl, which Yoemon was delighted with. Then, Yoemon and his wife held the babies in their arms.